

今回の ESD のひろばでは、『ESD をしない ESD』をテーマにお話ししたいと思います！

ESD の実践校として国際シンポジウムで発表された、対照的な二つの学校をご紹介したいと思います。一校目はイギリス政府からも最先端の学校として選ばれた公立校クリスピング校です。クリスピング校は ESD が学校の基本方針と位置付けられ、すべての教科、行事、学校運営など ESD を全面に打ち出しているのだそうです。校内が ESD 一色のような学校なんですね。そして、もう一校はオーストラリアでシュタイナー教育をしているマウントバーカー校です。なんとこの学校、ESD を銘打った授業や活動はひとつも無いんだそうです！なんで ESD を打ち出してもないのに ESD の実践校なのでしょうか？

ESD をしない ESD の実践校

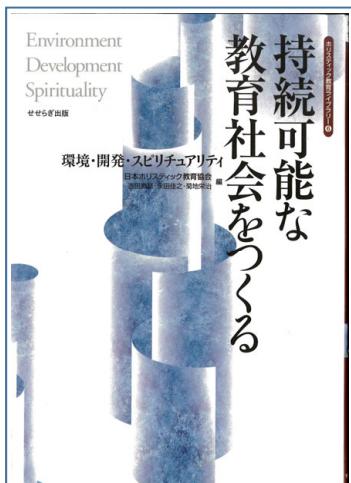
マウントバーカー校のグラスビー先生は、そのことについて「学校組織や校舎のデザインまでもが持続可能なイデオロギーを反映していれば・・・学校の大人たちによって手本が示されているような持続可能な理念があれば・・・あるいは、教室で行われる授業内容が世界に対する不思議、畏敬の念、そして愛情を生み出すようなものであれば・・・そのとき、あらためて授業で持続可能性について教える必要はなくなる」と言っています。聖心女子大学の永田先生はこれを暗示的な ESD と表現されています。理屈では学ばない小さな子どもは、大人の模倣や、環境から影響を受けて学びます。食文化や、生活する場所、保育観、人（という環境）自体に持続可能性があれば、子ども達は、無意識に持続可能な考えを心に宿すということなんですね。これを逆に解釈すると、子どもは素直に吸収していくから環境はたいせつですよって言われている様に感じます。「子どもには何が必要か？」、「それを与えるとどうなるのか？」私たちは考へていったほうがいいようです。

Youth worlds apart in the same land



難民収容センターで蠟燭に火をともす
生徒たち（アデライド・アドバタイザーペーパー（2004年5月29日）の記事）

悪環境の難民収容センターに駆け付け、収容された同じ年の難民とキャンドルを片手に、施設の環境の改善と、人権擁護の必要性を訴えるマウントバーカー校の上級生たち。同校に 10 か月間滞在し、在校生や卒業生にインタビューした永田先生の経験から、とくに上級生の特徴として、強い知的好奇心、気負わないこと、頭でっかちにならないこと、感情に走らないことが挙げられると言われています。



参考文献

「持続可能な教育実践とは」永田佳之著
持続可能な教育社会をつくる（せせらぎ出版）所収

永田 佳之（ながた よしゆき）

聖心女子大学文学部教育学科 教授

- これまでの活動や職歴 -

国立教育政策研究所・国際研究・協力部・総括研究官等

ユネスコ本部「ユネスコ／日本 ESD 賞」国際選考委員会委員

上越教育大学大学院「持続発展教育と地球環境問題特論」非常勤講師など